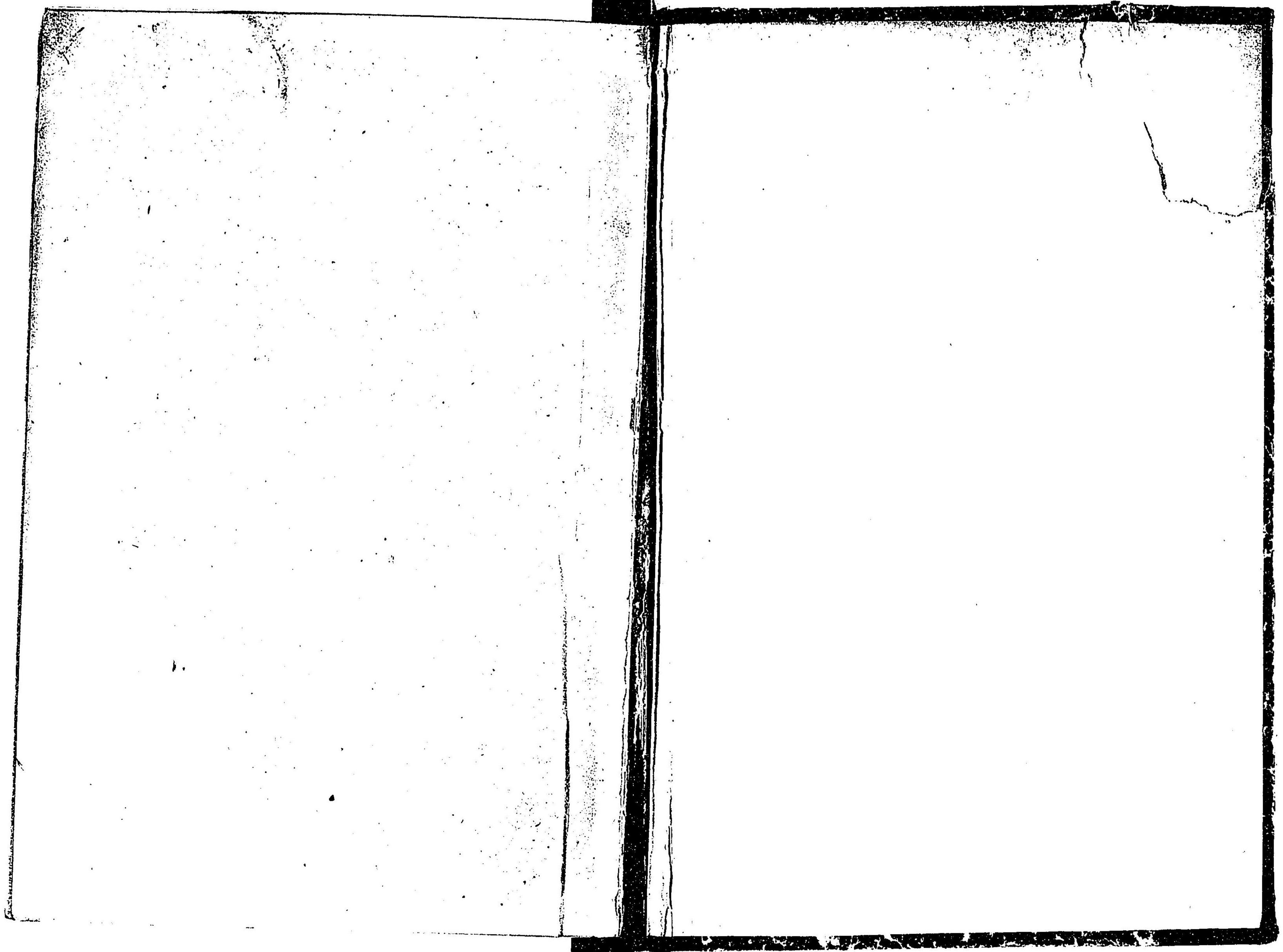


82
191

醒
舟
記
里

11. 1911



82-191

通信事務官正五位上居通豫先生題詞

青楓書院主人江龍清雄老先生序文

梅 菴 山 岸 憲 雄 著

醒 々 井 沈 理



神皇正統記
 創世記
 皇極經世一
 皇極經世二
 皇極經世三
 皇極經世四
 皇極經世五
 皇極經世六
 皇極經世七
 皇極經世八
 皇極經世九
 皇極經世十
 皇極經世十一
 皇極經世十二
 皇極經世十三
 皇極經世十四
 皇極經世十五
 皇極經世十六
 皇極經世十七
 皇極經世十八
 皇極經世十九
 皇極經世二十
 皇極經世二十一
 皇極經世二十二
 皇極經世二十三
 皇極經世二十四
 皇極經世二十五
 皇極經世二十六
 皇極經世二十七
 皇極經世二十八
 皇極經世二十九
 皇極經世三十

十七頁	十九行目
十四頁	二十行目
十四頁	二十一行目
十六頁	二十二行目
廿一頁	二十三行目
廿五頁	二十四行目
卅四頁	二十五行目

正誤

井醒の清水	八
十五水	八
醒か井は	八
懸令	八
十五水	八
十五堂	八
十五水	八
艶語	八
仙郷	八
論旨	八
住氏	八
居醒の清水	八
十王水	八
醒か井に	八
懸令	八
十王水	八
十王堂	八
十王水	八
艶話	八
仙郷	八
論旨	八
住民	八

神孫善世舊服色
刻之寧成哉羊原新
繁毒蛟如漢祗此亦
白鳥少丁意手結解舞
象心淨若也古空執

母召伯一懋善名保生民
子紀紀善是 醒并詩錄
代醒并里起句
按鹿山者洞也其居

壽園主在通豫



醒并里起句
按鹿山者洞也其居
世海經之
按鹿山者洞也其居
世海經之
按鹿山者洞也其居
世海經之
按鹿山者洞也其居
世海經之

醒が井の里の巻首に序す、
 短か夜の夢醒が井の上しはあれど、民の眠りを醒す使りは『是れ不敏なる吾が
 念頭に日夜往來して忘れざる苦痛なりしが、今や新に停車場を吾驛に置れ、
 時々刻々の汽笛の音は滔々たる水聲と相和して、大に里民の甘酔を警醒せん
 とす、實に吾里未曾有の慶事なり吾人豈祝賀せざるを得んや
 抑も日本武尊熱痛を斯泉にすゝぎ玉ひしより以來、地蔵菩薩は衆生の心病
 眼病を醫し玉ひ、傳教大師は此里の泉源に祈りて天下の憂を除き、盡せぬ泉
 は旅人三伏の疲勞を興奮醒起せしめたる者其數を知らず、
 吾里の歴史は生起の歴史なり、回醒の歴史なり、快新の歴史なり、吾等里民た
 る者よろしく吾里の歴史を心として日進月歩の現狀に應せざるべからず、
 即ち茲に吾人は其慶意を體して秃筆を匆忙の間に馳せ、斯里の歴史と名所舊

おたよむ人のあはれを。あはれを。
 あはれを。あはれを。
 あはれを。あはれを。
 あはれを。あはれを。

和のまよひ

江花清雄



おたけのまはりのあまのこころ。あまのこころを
あまのこころにまかせた。あまのこころを
あまのこころにまかせた。あまのこころを
あまのこころにまかせた。あまのこころを

おたけのまはりのあまのこころ

おたけのまはりのあまのこころ



醒が井の里の巻首に序す、

短か夜の夢醒が井の上はあれど、民の眠りを醒す使りは「是れ不敏なる吾が
念頭に日夜往來して忘れざる苦痛なりしが、今や新に停車場を吾驛に置れ、
時々刻々の汽笛の音は滔々たる水聲と相和して、大に里民の甘酔を警醒せん
とす、實に吾里未曾有の慶事なり吾人豈祝賀せざるを得んや

抑も日本武尊熱痛を斯泉にすぎ玉ひしより以來、地蔵菩薩は衆生の心病
眼病を醫し玉ひ、傳教大師は此里の泉源に祈りて天下の憂を除き、盡せぬ泉
は旅人三伏の疲勞を興奮醒起せしめたる者其數を知らず、

吾里の歴史は生起の歴史なり、回醒の歴史なり、快新の歴史なり、吾等里民た
る者よろしく吾里の歴史を心として口進月歩の現狀に應せざるべからず、
即ち茲に吾人は其慶意を體して秃筆を匆忙の間に馳せ、斯里の歴史と名所舊

跡を略記して大方の嚮覽に供す、其意惟だ内は郷黨諸氏の反省を望み、外天下先覺者の來遊啓發を希ふにあるのみ、措字練想の熟せざるは素より吾人の意とする所にあらざるなり穴賢々々、

明治三十三年三月

著者しるす

醒が井の里目次

一 醒が井の里發行の趣旨……………	一	一 西行水……………	一四
一 醒が井の歴史……………	三	一 泡兒の墓……………	一六
一 井醒の清水(通稱醒が井の水)……………	六	一 弘法水……………	一八
一 蟹石……………	八	一 天野川(往昔阿奈の川と稱す)……………	一八
一 腰掛石、鞍懸石……………	九	一 西阿彌墓……………	一八
一 紫石燈籠……………	九	一 鶯が端……………	一九
一 天覽の不斷櫻……………	一〇	一 横川古戰場……………	一九
一 地藏堂……………	一〇	一 普門山松尾寺……………	二〇
一 加茂神社……………	一二	一 漆が瀧……………	二〇
一 影向石……………	一三	一 總谷養漁場……………	二〇

一 住友製絲場	二三
一 八葉山蓮華寺	二四
一 北條仲時墓	二六
一 磨鉞嶺	二六
一 山津照神社	二七
一 安國山總寧寺	二八
一 源中納言具行墓	二八
一 柏原驛	三一
一 寢物語里	三一
一 伊吹山 (一名勝吹或は伊宮貴と稱す)	三二
目次畢	



醒が井の里

梅庵山岸憲雄著

醒が井の里發行の趣旨

吾が醒が井は東海道美濃路回り、及び中仙道の一驛にして不破の關路の要勝を占め、番場、醒が井、柏原、不破の關屋と並べたゞへて、古來都より吾妻に通ふ街道に當りぬれば、其の名所舊跡は昔より詩に詠じ歌によまれ久しく世人の激賞する所となりぬ。

昨日立つ都の名残り

思ひ寐の

近衛局

夢も結はぬ醒が井の里

岩か根をわかれて出る醒が井の兼良公

流れや遂に近江路のすゑ

去れども未だ此名勝を廣く天下に紹介して、吾が醒が井の千載かはらぬ眞清水の譽を世の人々に知らしむる冊子も無く、わけて開け行く大御世の光と共に交通の機關備はり行き、東西の旅客は皆汽車の便りに、千里の道を東の間に往き復ふ明治の新天地となりてより、長亭短驛日麗らかに金紋の前箱さらめき渡りし往昔の宿驛も、今や寂寞として旅人の片影を留めず、可惜ら稀有の舊跡も次第に世人に打忘れ、騷客雅人の幽なる記憶の裡に僅かに其面影を留むるに至らんとせり、茲に村民等彼我の便益を計り、且は此の名所を山間に埋没せしむる事を本意無く思ひ停車場の設置に熱心せらるゝと多年、今や漸く宿積の希望を達して、新に醒が井停車場を驛端に置かれ、其便宜に依りて再び是地の名勝を世間に紹介し、天下第一の名泉を廣く世人にすゝむるの榮に會せり、即ち茲に當驛附近に散在せる名勝舊跡の概畧を記述して、探勝訪古の雅客に示す、若しこの冊子を東道の主人として、千載の勝跡を世人に紹介するを得ば實に著者の満足とする所なりとす、

醒が井の歴史

今熟らく醒が井の里の歴史を温ぬるに、神代の昔は雲深し紀元七百七十三年日本武尊御東征の、をん歸路、伊吹山にて山神を平らげ毒氣に中り玉ひし時、熱に惱みて此里まで来りまし岩間より湧出る清泉を見そなはして、其熱痛を冷し玉ひけるに御惱み頓に止みて、御氣色爽快なりしかば尊即ち居醒の清水と名け玉ひ又醒が井の水と呼びなしぬ、(此事跡を確むるには日本書紀景行紀、源平盛衰記等に詳なれば此處に發せず)

雄略天皇の御代勅使美濃へ下りての歸路大蟹を此泉に飲せて石に化せりと言傳へられ、壬申の亂、息長横川の合戦ありし翌年(紀元千三百三十三年)不破の關を置かれたるより考へて、昔時より此里が吾妻行の要路に當りしを知るべく、斯く行通の繁きにつれ驛次も次第に其基源を開きたるべく、弘仁の朝、傳教大師親ら地藏菩薩の尊像を彫刻して、井泉の中に安置せられたるなど、是れ吾が里と泉との譽を擧ぐる便りなりけん、降て延喜の頃、仲算法師及び淨藏貴所更に泉源を開き、六條天皇

仁安の末、西行法師此里の歴史に多くの光彩を添へ、鎌倉時代の初年、加茂長明、藤原爲相卿等の歌人其の錦心を醴泉にすゝぎ、阿佛尼は十六夜日記に

むすふ手に濁る心をすゝきなは

浮世の夢や醒か井の水

の詠を留め、中務卿宗尊親王將軍を廢せられて還洛の途すがら、無限の感慨と無量の悲憤を斯泉に寄せて

汲てしる人しもあらは醒か井の

中務親王

清き心を哀とや見ん

の吟あり鎌倉時代に至つては、京都、鎌倉、の交通頻繁なるにつけ、當驛の如きも人家益々増加したること明けし、元弘三年北條仲時京師に敗れて鎌倉に還らんとし、當國番場に討死するや華房全幸等又これに死し、其子孫江龍谷に蟄伏せし者即ち江龍一家の祖先なりとす、室町時代に於ては、頓阿法師、一條禪閣兼良公等の詠歌の外別に傳はる所なし、豊臣氏の際、土肥六郎兵衛、城を此地に構へ醒か井殿と稱へ

しが、關が原の役、西軍に屬して没滅せしこそ是非なけれ、されども其子孫因州に遷り鳥取城主池田家に仕へて世を老職の家柄たりしと謂ふ、徳川時代に至り、中頃大和郡山城主柳澤家の所領となり、西國諸侯參觀交代の通路に當り、旅客釋絡として其繁盛一方ならず、湧きて盡せぬ清泉に夏の日の渴きを醫し、愛嬌溢るゝ飯盛の一笑に秋の夕の疲を忘れ、斷へず咲きぬる櫻木に四時の眺めを集めたる者、今や惟だ過つる往昔の夢物語となりぬることわびしけれ、

斯の里、警察分署、學校、製糸場、養魚場等の設あり旅館は井筒屋(兼料理店)たゝみ屋等あり、名物には醒か井餅(寒水に浸して製したる者得も云はれね妙味あり)醒か井密柑水など賞すべきなり、

去來是より仔細に斯地の名勝を紹介して、鐵路の便りに天下の舊跡勝地を探り玉ふ雅客の手引と致さばや、

斯地の名勝は古來三水四石と、たゞへて、廣く人の口に膾炙する所なり、去れど今は探勝の便利を計り其所在の次第によりて記叙するが故に必ずしも此を一所に並ぶる

能はず、且つ古蹟の山來等事往々荒唐に趨り妖妄に陥るものなきに非らず文明の今日に在ては、兒童も猶ほ其無稽なるを知ると雖も、從來稱へ來りたる傳記の如きは妄りに之を改訂せず記載したれば、讀者そのこゝろしてよ、

居醒の清水 (通稱醒が井の水)

雅客若し斯地の名勝舊跡を探らんとして、醒が井驛に下車し驛道を南する事町餘せば、清き流に架せる橋の傍して居醒とあるを見ん、これ此水に因める名なり、橋を渡りて流に遡り宿驛家屋櫛比の間を東行すると數町、右側、堂山の麓を擁し綠蔭奇巖相重なり、青苔深く蒸せるの所此を醒が井の水源とす、銀水滾々音をなして迸り、水聲滔々輪を爲して波紋を描き、清玲瑠璃の如く涼氣神に迫りて、實に千載無盡の靈泉たるを感せん古歌數首、

醒が井の木蔭の清水掬ふとて 長 明
しはし涼まぬ旅人そなき

川となる末まで清し岩間より 爲 相 卿

あまりて出る醒が井の水

短夜のあしたの眠り醒が井は 頼 阿 法師

耳もとどろく水の音哉

こゝろみに浮世すゝかんこけ清水 芭 蕉

聞きたにも心すゝしき醒が井の 瀬 川

苔の清水を今日そ汲ぬる

若し夫れ三伏の熱湯を一掬の水に潤し、杖を留めて樹蔭に息はんには、清烈の氣襲ひ來りて自ら肌の寒きを感じるに至らん、

夏の日も掬へは薄き氷にて 兼 良 公

あつさもやかて醒が井の水

今筆の因みに書きしるさんに、去ぬる明治二十八年十月二十七日近衛師團長北白川宮能久親王殿下、 畏くも金枝玉葉の御身を以て臺灣匪徒征伐のをんみぎり、瘴烟

海霧に中らせ玉ひ御惱み危篤に迫り玉ひし際、時の近衛參謀長鮫島員規氏御傍に侍し深き悲歎に涙をしぼりて

有らは今さゝけまほしを醒か井の 鮫島員規

うまし眞清水一平たに

吾人は千載の上、日本武尊の御事跡と今、師團長宮殿下の御事跡とを仰ぐに、竹の園生の御身を以て西に東に戎夷を征撫し賜ひし英武のほどと、且つは斯泉の名譽を思ふて毎に無限の感慨なくして斯泉に對する能はず、

蟹 石

是れ所謂有名なる四石中の一にして泉源に横はれり、傳ふらく人皇二十二代雄略天皇の御宇美濃國本巢郡に奇異の靈泉湧出する由、叡聞に達し實否をたゞさんため、勅使濃州に降りて泉の下を見給ふ時、水中より三尺有餘の大蟹這出たれば、いと珍らし叡覽に備へまつらんとて、斯里まで持歸り水飲ますとて河流に放ちたるに、

忽ち化して石と成りぬ故に蟹石と名けたりと、

水に來て影かんでしも澤蟹の 淨藏貴所

名のそひ残る川の面の石

さゝれ蟹あしはゐあかる清水哉 芭 蕉

腰掛石、鞍懸石、

是れ又た四石中の二石にして、俱に水源を距る十數間の下流、地藏堂の東に當る泉中に相竝べり、木柵を四邊に繞らしたるは腰掛石にして、其右方に横臥するを鞍懸石とす、前者は日本武尊これに腰うちかけて御脚を水に浸し玉ひしよりしか名づけ、後者は其時乘馬の鞍をかけ置き玉ひしより斯く呼びぬとぞ、無情の岩石また深く尊の餘光を悦ぶなるべし、

紫 石 燈 籠

以上二石と相並びて水中に立てる石燈籠なり、元來其名の呼ぶ如く眞實紫石の燈籠にて珍奇の逸品なりしも、享保年中領主郡山藩主柳澤甲斐守の懇望にまかせて獻納したる後は、普通の石燈籠と易置したるも尙古奇愛すべき者あるなり

天覽の不斷櫻

井泉の汀頭に在る一老樹、舊花僅かに謝せば新蕾忽ち含みて、開落四時に絶へたる
と無く、千代に盡せぬ眞清水と相並びて實に吾里の双奇なり、百花悉く謝して萬枝一
紅を留めざるの時、老樹時ならぬ盛色を吐きて、花瓣翻々清流に浮動するのさま、
誰か一顧を惜むものあらんや、殊に明治十一年十一月 今上陛下御巡幸の際本驛に
御休憩遊ばされ、懸合籠手田安定氏一枝を採りて天覽に供へしに、叡感斜ならず同
夜大垣行在所へ持せ遊ばされしと承はる、

地藏堂

泉池の西に在る一小堂にして、本尊地藏菩薩は傳教大師の作、長一丈二尺の座像なり、往昔より水中に安置して雨露霜雪を凌ぐべき寶蓋無く、俗に臂冷し地藏と唱へ
遠近深く尊信し來りしが、慶長年間濃州大垣の城主石川日向守其靈驗を被り、即ち
報恩のためにとて砂石を運び、泉池の邊側を埋めて一字を建立せり、其後ち靈驗日
日に新にして香華參籠の輩益々多かりしより、堂宇も立派に再築せられぬ、殊に眼
病の者多く此尊に祈請し、此泉に眼を洗ふて驗徳新なりしが、明治八年祝融の災に
罹り同二十二年に至り大橋利助等の有志者、十方の淨財を募りて現今の堂宇を再建
せり、左に縁起の要約を記して有縁の信者に便りす、

近江國醒が井延命地藏尊の來由は、人皇五十二代嵯峨天皇弘仁八丁酉の年旱魃百日
を超へ、效野に青草無く河湖皆涸渴せり、爾時延曆寺傳教大師諱は最澄勅選に當
り玉ひて、叡山根本中堂に祈雨の壇を設け秘法を修し玉ふに、中堂の藥師如來夢
の如く告給ふは、是より東數十里の行程を経て清淨の泉源あり、彼處に至りて雨
を求むべしと大師即ち佛勅に遵じて斯里に來り玉ひしに、鶴髮の老翁忽然現はれ

來りて曰く、汝今勅に應じて此泉源に來れり、願くは地藏尊の像を刻みて此處に安置せよ、夫れ地藏尊は重苦の有情を悲しみ六道の街に現じ、拔苦與樂代受苦の願も餘尊に超過し玉へり、汝今此尊像を彫刻せば忽ち旱魃妖瘵の苦を免れ、遠くは末代の衆生に壽福を満足せしめ、永劫三途の苦を脱し眞無漏の因を成し玉はん、我は此水の守護神、別雷皇なりと忽ち水中に入り玉ふ、大師即ち菩薩の尊像を彫みて祈念を凝し玉ふに、大雨三日民皆な再生の思を爲し妖瘵皆しづまる、是れ偏へに薩埵の大悲利生の深き所以、且つは大師の智行兼備比類無き徳光の顯現なり云

加茂神社

今水源池より石橋を渡りて歩を堂山の麓に移せば、天に胡する老樹鬱蒼たる間、數百の石階を上り行き神さびたる華表頂上、別雷皇大神宮の懸額を望み見る、是なん吾里の産土神を奉祭せる社壇にして、域地清淨森嚴の氣、髣髴として風光また雅致、

夏日の一勝遊地たるを失はず

影向石

是れ即ち四石中の一にして水源より流に沿ふて下ると町餘、左側の山徑に入る寺が谷(寺が谷は金光山福泉寺。金剛山福遊寺。其他數坊の精舎ありしゆへ。此稱ありて。現に寺跡の認むべき者あり。)に在り往時氏神、別雷皇神の影向詫宣ありし舊蹤にして、三頭の巨岩古色蒼然今尙ほ其面影あるを見る

此里へ天降りますをん神の
しるしや残る影向の石
仲算

十五水

延喜の御代に淨藏貴所とて三善清行の第八男に當れる高僧(後年京都八坂の法觀寺に住し塔の傾斜を祈り直せりと言傳ふ)諸國遍歴の途次、仲算大徳斯里にて結縁の爲、湧泉を祈り出したりと聞き我も亦しかせんとて、山の根に至り巖石の下を回めければ清水滾々として涌出し、如何

なる大旱魃の時と雖も更に絶ることなし、去れば素より淨藏水と稱すべきを、中古其の近傍に十五堂ありしにより、其に因みて十五水と呼なせしとぞ、

西行水

十王水と共に三水の一なり、其の由來を尋ぬるに昔時山階寺の松室に仲算とていみじき大徳あり、喜多の院空晴僧都の弟子にて、水中化現の人と稱せらる、頃しも延喜の御宇仲算同行數多にて吾妻の方へ修行しける折しも、天下大旱魃にて如何なる清水も皆涸渴せる中に、この醒が井の水のみは常に變らず湧出すること盛なれば遠近となく集り汲みぬ、茲に一人の賤女水を汲みて遙の道を歸りけるに、仲算旅行に疲れ咽喉かわきて堪難ければ、彼女に向ひ一杯の水を乞はれけるに、女曰く遙々苦辛して汲む水なれば容易に乞ひ玉ふ謂れなし、いみじ氣なる高僧定めて行徳やはすらん、自ら水を得て渴を潤し玉へと言ければ、仲算實にも懐中より短劍を取出し印を結び咒文を唱へ、とある巖石の端を截り玉へば清水忽ち迸り出で見る人奇異

の思をなす、爾來如何なる旱魃にも此水常に絶ゆること無し、夫の西行撰集抄に謂ふ處の、仲算劍を抜て山の鼻を切りければ清水瀧の如く流れ出たり云

是れ即ち此處なり其後仲算は攝州箕面にて千手觀音と現じ瀧より上天して見へず成りぬと傳へられぬ、然るに此水を西行水と稱することは、仁安二年西行法師東より京師へ上りし折から、この側りの茶店に休息し斯泉に至りけるに水中に一小石あり、西行法師此石を我に得させよと有ければ、いと易き事とて與へぬるに即ち其石を茶店に預け置て都へ上りける、然るに此石より始終水滴りて止むこと無ければ、主人不思議の思ひを爲し人に語るに皆怪みて打割り見れば長サ四寸許りなる蛇二つ飛出で巖の下に隠れたり、其後西行關東へ趣くとて其茶店へ立寄り巖に預けたる石たべと有ければ主人有りし次第を物語るに、西行法師いと残り惜し氣に言ひけらく彼石は龍石とて水石なり、吾れ武藏野へ持行きて千萬頃の穀を養ふ程の清水を出さんと思ひしに、主人の過失にて甲斐無きことかなと深く惜みて、

武藏野に思ひしとは夢醒非

波にくたけて石惜しと思ふ

と詠れし外、此水が苔石の下より湧出るを見て、苔の清水と賞讃せられ、且つ法師に因縁深き泡兒の墓此水の上りに在るにより斯名づけられたるなり、

泡兒之墓

西行水の湧出る巖の上に在る一小五輪塔にして、仁安三戊子の年次秋の建立なり、其因縁に就きては頗る小説的艶語ロマンティックの伴へるあれば、奇怪を厭はず紹介せんに、往古此里に旅人の爲に茶店を開きて世を渡る夫婦の者あり、其間に一人の娘を設け十四五歳となり容儀他に勝れて殊に孝養の深かりければ、父母の寵愛淺からず然るに西行法師東遊の時、此茶店に憩はれしに如何にしけん。彼娘西行に戀慕の心起りて切なりけれど、まだ初戀の打つけに言出し得で、西行出立の後せめてもの思遣りに飲殘されし茶の泡を飲めば、是より不思議に懷妊しければ父母驚きて娘を責問ふに、娘包ます仔細を語り終に一男子をあげたり、父母是を養育するに

次第に容貌玉の如く、其後年閱て西行法師吾妻より上り此茶店に休息の折から、夫婦其兒を抱出で、右の譯を物語るに、西行奇異の思を爲し兒を懷き取り熟視して曰く、夫れ雀變じて蛤と成り、鳩化して鷹となる、有情變じて非情と成り、非情化して有情となる、皆天地の化育なり、今一滴の泡變じて此兒と成る汝我兒ならば元の泡に歸れとて、

水上は清き流れの醒か井に

浮世の垢をすゝきてや見ん

と即吟有ければ不思議なるかな彼の兒の身體忽ち消へて元の泡と成りぬ、西行是を見て實に我子なりけりとして是處に小五輪塔を立て、一煎一服一期終、即今端的雲脚泡、と書して、若し人は是處の名を問はば、兒は醒果し兒醒が井と云ふべしとて立去られぬ云云

是より是處を兒醒が井町と云ひ、石塔には今に西行の手跡髣髴として残り、好事者は是非に一覽せざるべからず、其後ち文人騷客の訪來れる者多き中和歌の見るべ

きは、

傳へさく夢の浮世や醒か井の
水の泡兒の消ゆるならひを

宗

祇

弘法水

停車場より西を望めば形ち鐵兜に似たる一嶽を見る、此を兜黛山とす山麓に弘法水の清水あり弘法大師に因める名泉なり、

天野川 (往昔阿奈の川と稱す)

源は柏原菖蒲が池なりと云ふ蓋し諸山の溪水相會し琵琶湖に朝するものなり、此河流に鮭、鱒、小鮎等を産し捕漁に好く、殊に夏時の觀盤絶妙にして著名なり、下流横川と相會する所より息長川と稱す、

西阿彌墓

醒が井の水源より東に行くに數十間、右側の山麓に在る一小塔なり、不幸にして未だ西阿彌の事蹟を詳にせず、伏して大方の高教を待つ、

鶯が端

醒が井驛の東端に在る舊蹟にて、西北の眺望極めて佳なれば往返の旅客、知るも知らぬも皆杖を駐めて一憩を取りし所なり古歌に、

旅やとり夢醒か井のかたはとり

能因法師

初音も高し鶯の端

是れこの名稱の上つて來る所乎、此はとり路傍櫻樹多く春候の野遊佳興深し、

横川古戰場

日本書紀第二十八卷に丙申男依等與近江軍一戰、息長横河一破之斬、其將境部連藥一とある、白鳳元年秋七月壬申の亂の古戰場にして、今は中仙道の往復に當り醒が井驛

の西端を流る、丹生川の末へ即ち當時の横川なりとす、秋夜月明に乗じて強者ども
の跡を忍べば又幾多の感慨を禁する能はず、

普門山松尾寺

本村大字上丹生にあり、崇峻天皇の創建、 役小角の開基三朱沙門の弟子松尾童子
此を中興す故に松尾寺と名く、天台宗に屬し敷院あり殊に山水の風景に富み杜鵑鳴
鹿の名所なり、且つ中將姫の曼荼羅は當寺の什寶なり、

漆が瀧

同村の山間に在る名瀑にして、素練一條半空に瀰り水清く地靜に樹木森々として畫
尙は暗く真に一仙境たるを失はずと雖も、山間僻幽の地空しく雅客の探訪を待顔な
るを恨なれ、此地漆樹多く黄葉の頃殊に妙なり、瀧の名もこれに因めるなり、

總谷養魚塲

同じく上丹生字總谷に在り、蒲生郡八幡町西川貞二郎氏の私設にかゝり停車場を去
ること里許、地稍邊陲、道や、平坦ならずと雖も、四面の巒峰群がり立ちて、別に一
仙境を限り丹生川の清流其間を奔りて温度四時に變せず、急湍巖に激し、壁珠空に
舞ひ、幽邃閑閑にして遙かに人寰を隔て、自ら桃源の趣を存す、養魚の池分ちて十
八區と爲し、大小の魚洋々として樂み、潑々として躍る、
如意山人曾て此地に遊びて題すらく、

宗溪之奇天下無、十有二景四時殊、其水清美其山秀、就中養得萬種魚、
有樓可宿酒可呼、不是樂土是仙鄉、寄語四方好遊客、宗溪之奇天下無、
と別に、小野湖山、江馬天江兩老と其十二景に就て各五言一首を詠す、左に記して
遊覽の士に便りす、

峽口怪巖

谷 如意

奇峯夾水立。巨石對成門。洞天從此入。何處是仙源。

巖寶噴泉

小野湖山

陰竇深無底。噴泉一道奔。太湖三萬頃。此水是其源。

回嶺櫻花

江馬天江

暖風催早櫻。昨夜花開半。山閣起來疑。宿雲猶未散。

西崦紅葉

谷如意

昨夜微霜落。山楓染幾分。晴嗽來映射。紅盡一崦雲。

野沼游鱗

小野湖山

方塘如布卦。坤乾定位置。養魚如養民。遠學伏羲氏。

圓島釣磯

谷如意

波光繞島清。即是魚千里。我來學釣翁。宛在大瀛裏。

松岫啼鵑

小野湖山

想見遠征地。思歸遊子情。松梢一輪月。啼鵑可畫聲。

響岑鳴鹿

江馬天江

日落樵夫散。遙岑噪鹿群。呦々聲不斷。響度萬重雲。

橫川螢火

小野湖山

俯仰易爲感。川原古戰場。鬼燐寒影熄。唯看亂螢火。

筏泚石鷄

江馬天江

溪樓神思清。詩夢幾回覺。幽磳石鷄多。通背聲聞々。

檜岨懸瀑

小野湖山

泉石勢相激。飛珠如可拾。久立弄餘清。不覺衣布濕。

滄峯吐月

谷如意

連峯若波浪。湧翠半空流。暮雲忽飛散。月在巨滄頭。

住友製糸場

本村大字下丹生にあり創業は明治二十一年にして爾來間斷なく斯業に従事せられ、現任場長北脇新右衛門氏の敏腕によつて支配せらる、機械は佛國里昂ヘルトウ會社の製造にして、大箴直揚接緒器を備へ蒸氣機械を以て運轉し、繰糸釜九十六個(一釜

四口取にて乾燥仕掛を具ふ。立緒釜四十八個を備ふ又附屬機械は専ら輕便を旨とし、線糸釜五十個を備へらる、原料は最善良の繭を撰み一箇年二千石以上を購入し其の精製品は、貳千貫以上に達すと謂ふ尙日ならずして大に斯業を擴張せらるゝの計畫ありと傳へらる、宗溪に遊ぶの途次就て一覽を請ふも亦妙なるべし、

八葉山蓮華寺

隣村息郷村大字番場に在る名刹にして、推古帝の二十三年聖德太子願開の勝地、憲崇律師創建の道場にして天下三法隆寺の一なりしも、建治二年六月一日雷火のため焼失してより僅かの草堂を營みて、番場の辻堂と呼び形ばかりの跡を残せしが、弘安七年仲夏、時宗の俊聖巡化の砌り當寺の住僧畜能、畜生、深く上人に歸依して其門に入り、鎌の刃の城主土肥三郎元頼も亦深く其徳を仰ぎ、髪を薙りて道日と呼び、伽藍を復興して上人を請致す、是より寺を時宗に改め周圍に入ッの峰あるより八葉山蓮華寺と改めたり、本尊如來も従前の釋尊の外阿彌陀如來を相竝べ兩尊竝立の本

尊にて一見奇異の思を爲さしむ、爾りしより時宗一向派の總本山となり花園帝以下御歴代論旨を賜はると多し、元弘三年五月九日六波羅北府北條仲時京師に敗れて東歸の途次、糟谷三郎宗秋以下同族郎黨四百三十有餘人と當寺に入りて自殺したるは史家の熟知する所、其の過去帳(糟谷十郎の手記にして北條仲時以下四百三十有餘人の法號及び辭世の歌等を詳記したる稀有の書なり)歴存して一見轉々懷舊悽絶の情に堪へざらしむ、近時碑を門外の前庭に立て、清雄江龍君これに銘して曰く

寒烟冥々、荒草離々、伏屍何處、血川傳悲、

と血川は門前を流るゝ細流なり今諸將の辭世に就きて兩三首

故郷にかへらぬ雁は残り居し 糟谷宗秋

はかなき花とともに散るかな

都にて聞きたる遠き故郷を 同人

なほへたて行旅の空かな

都にて散る花よりも仇なるま 上野式部大夫

ことしの春の命なりけり

尙當寺の什寶中、妙法院堯延法親王筆蓮華寺緣起、關白一條冬良公筆稱阿瑞夢記、參議世尊寺行高筆蓮華寺勸進序、及び弘安七年十月十七日鑄造の梵鐘其他古書畫の珍品頗る多し、

所謂八峯とは、彌陀峰、米山、釜手、釋迦岳、廣谷、紺袋、池谷、眉間山を云ふ

北條仲時墓

蓮華寺の西四町餘六波羅山の上に在る五輪塔にして同寺三祖同阿の葬る處なり、仲時等の事跡は世人の詳知する所なれば別に贅せず委細太平記に在り

磨 鍼 嶺

隣村息郷村大字番場の西端に在り土人傳へて云ふ往昔書生あり京師に修學して得業せず中途挫折して歸郷の途次此嶺を過ぐ、時に老翁の斧を磨するを見て其の故を問

ふ、答へて曰く鍼と爲さんとすと、書生大に感悟して再び西上して就學すること多年遂に業を成せり故に此名ありと云ふ

想ふに此地磨鍼と稱するを以て李白の故事に附會せしものならん乎、山頂望湖亭あり亭上の脚下、磯崎、朝妻等を瞰下し、遙かに竹生島を水雲渺茫の間に望み眺望佳絶洵に湖東の壯觀なり、東坡の所謂「望湖樓下水如天」の一句は此處の爲に吟じたるもの、如し、

山津照神社

隣村息長村大字能登瀬に鎮座せしめて停車場を去ること西北十數町、俗に青木大梵天王社と云ふ三代實錄に

貞觀八年閏三月五日近江國從四位上、山津照神に正四位を授く、

とあるは是なり箕浦の庄二十餘箇村の産土神とあがめ式内の郷社なり、境内に人皇九代開化天皇の玄孫 神功皇后の御父息長宿禰王御夫婦の墳墓を發見せり、後鳥羽

天皇行幸の跡、後光嚴帝宣旨の勅願所にして、朝廷の御由緒殊に正しく古代の寶物類も亦少からず、此社は城内廣寛にして社殿頗る宏壯を極め郡内の一名祠に數へらる、

安國山總寧寺

同じく息長村大字寺倉字總寧寺谷に在り寂靈禪師の開基にて、永徳三年近江の太守佐々木六角氏頼入道雪江崇英の開基にかゝり、曹洞宗の小本寺なり四面山を繞らしたる絶塵の一區、以て離言の道を味ふに足る、

源中納言具行墓

醒が井驛より柏原に達する中仙道の猫折坂にあり、貞和三年一月二十六日田兒六郎左衛門尉の建立にかゝり、俗に法華塔と云ひ又乳の墓と唱へて遠近の産婦乳を此塔に求むるに效驗いと新なり、蓋し具行卿は、後醍醐帝帥の宮と申し奉りし頃より

奉侍して、寵遇殊に厚く誠忠無二の方なりければ、笠置城没落の後捕へられて鎌倉へ護送せられ、當所にて討れ玉ひぬ其時護送警衛の任に當りし佐々木道譽と卿との問答は、忠臣の義烈、武士の優情誰も斯くこそありたけれど、思遣られて惟だ讀むだにも涙こぼるゝ計りなれば、今太平記の文をかりて當時の事情を精叙せん、

源中納言具行の卿をば佐々木佐渡の判官入道々譽、路次を警固して鎌倉へ下し奉る道にて失はるべき由、兼て告げ申す人や有けん逢坂の關を越へ玉ふとて

歸るへき時しなけれは是やこの

ゆくを限りの逢坂の關

勢多の橋を渡るとて

今日のみと思ふ我が身の夢のよを

渡る物かは勢多の長橋

此卿をば道にて失ひ奉るべしと兼て定めし事なれば、近江の柏原にて斬奉るべき由、探使襲來していらでければ、道譽中納言殿の御前に參り、如何なる前世の宿

習によりてか多くの人の中に入道預り参らせて、今更箇様に申候へば且つは情を知ぬに相似て候へ共、斯る身には力無き次第にて候、今までは随分天下の赦を得て口敷を過し候つれ共、關東より失ひ参らすべき由、堅く仰られ候へば、何事も先世のなす所と思召慰ませ給ひ給へと申も敢ず、袖を顔に押當しかば中納言殿も不覺の涙すゝみけるを押拭はせ給ふて、誠に其事に候此間の儀をば後世迄も忘れ難くこそ候へ、命のきはのとは、萬乗の君已に外都遠島に御遷幸の由聞へ候上は、其以下のこと共は中々力及ばず殊更此程の情けの色、誠に存命すとも謝し難くこそ候へと計にて其後は物をも仰られず、祝と紙とを取寄せて御文細々と遊ばして、便りに付て相知る方へやりて給はれとぞ仰られける、斯て日已に暮ければ御興さし寄て乗奉る、街道より西なる山際に松の一群ある下に御輿を昇居たれば、敷草の上に居直らせ給て又祝取寄せ閑々と辭世の頌をぞ書れける、

逍遙生死四十二年、 山河一革天地洞然、

六月十九日某と書て、筆を擲て手を又へ、座を直し給とぞ見へし、田兒の六郎左

衛門尉後に回るかと思へば、御首は前にぞ落にける、哀と云ふも愚なり、入道泣々其遺屍を烟となし、様々の作善を爲してぞ御菩提を弔奉りける云云
吾人は涙無くして此一條を讀下する能はず嗟

柏原驛

醒が井驛を距ること一里十五町餘中仙道の一驛なり、里人の傳ふる處に曰く古へ此地より毎年正月御齒固めの餅とて長サ二寸、幅一寸八分の餅を柏の葉に盛りて獻するの例ありしにより村の名とす云云驛中に成菩提院あり傳教大師の開基にかゝり寂照山圓乗寺と號し有名の古刹なり

寢物語里

隣村柏原村大字長久寺に在り、美濃、近江の國界なり人家相連り唯一壁を隔つるのみにして、兩國の人臥して相談話するを得、故に此名あり此地一名を長競と云ふ、

蓋し、美濃、近江の山左右に相對し、長を競ふを以てなり藤川記に歌あり、

右ひたり見て行きゆけはあふみ美濃

ふたつの山をたけくらへする、

伊吹山 (一名膽吹或は伊富貴と稱す)

日本七高山の一にして、美濃、近江の間に蟠まり、積雪初夏に至るも去らず、是れ史に云ふ所の日本武尊の毒氣に中り玉ひ、吾里の泉に熱を醒し玉ひし因ある山なり、吾里より東北二里許りにして上野に至り此村にて導者を備ふて登る、上野より絶頂まで三里の間山道峻峻面を撲つが如く、頂巔に達すれば彌勒菩薩を安置する石造の堂宇あり三朱沙門の開基なりと傳へらる、此處にて登山の人朝嗽の東海に上るを見るを例とす、晴天には凡そ十有餘州の山川城邑悉く一望の中に撥め看るを得べく壯絶又快絶、殊に此邊珍奇なる數百種の藥草(織田信長曾て、此山を天主教の僧徒に與へたる時、西人の植へたる藥草なりと云ふ)のみなれば清香馥郁鼻を撲ち、神澄み氣爽かに浩然として羽化登仙の思ひあり、南に下れ

ば彌高寺あり寺の附近楓及び免兒傘と稱する草のみにして秋候には紅錦織るが如し、西には九折七曲の坂あり此坂より湖水を望めば遠きものは淡く近きものは濃く笑ふが如く迎ふるが如く、宛然一幅の活畫に似て眺嗚甚だ佳なり、是より北に行けば伊吹と七尾の山峽あり、東は伊吹の白砂利と稱し絶壁削るが如く甚だ峻なり、牧童草を刈り束ねて之を投すれば瞬時に姉川の岸に落つと云ふ、麓には伊吹神社及び上平城址あり伊吹神社は素盞鳴尊を祭る、上平城は京極氏の居城にして礎石猶存せり、古より國歌多し就中、續古今集曾禰好忠の

冬ふかく野はなりにけり近江なる

いふきの外山雪降ぬらし

後拾遺集藤原實方の

かくとたにゆやは伊吹のさしも草

さしもしらしなもゆる思ひを

等最も人口に膾炙す、

以上醒が井附近に於ける名勝舊跡の大畧を紹介し了りぬ、要するに當地は水清く山美にして、銷夏の好適地たるを失はずと雖も、住氏の多くは未だ舊習になづみて社會の大勢に適應せず、従つて進歩改善の氣性に乏しきなきやは余の竊かに憾とする處なり、今や商工時代に向はんとする現時の國民としては尙ほ幾多の缺點あるを免れずと雖も、停車場の新設は晴天の霹靂に比し惺眠を覺醒すべきの好時期とす、宜しく此際舊弊を打破し一致協同して此文明的機關を利用し、内は教育を奨励して子弟の智徳を進め、外は實業に盡瘁して利殖の道を計り兼て斯里を優樂の一清淨天地となさるべからず

先づ其方法としては、公共心の奨励、風俗の矯正、金融機關の設備、高等小學の併置、名所舊跡の保護、旅客待遇の親切等吾人里民が日夜奮發從事すべきの業真に最も多端なりとす、

吾等此に開驛の祝酒に酔ふて他行の便利をのみ是れ悦ぶべきの時ならんや、余は終りに蒞むで世人が此里の名勝を訪ひ併せて文明の空氣を齎らして里民を啓發せられ

ん事を再望して止ざるなり、

醒が井の里 終



明治三十三年三月廿九日印刷
 明治三十三年四月三日發行

定價金拾五錢

著者兼發行人

山 岸 憲 雄

近江國坂田郡醒ヶ井村
 大字醒ヶ井三十一番屋敷

印刷人

須 磨 勘 兵 衛

京都市下京區五條通高倉西入
 萬壽寺町十番戶

不 許
 複 製

印刷所

佛教圖書出版株式會社

京都市下京區油小路通
 松原上ル籠町十二番戶

3/34

82
 191



株式會社 美濃商業銀行

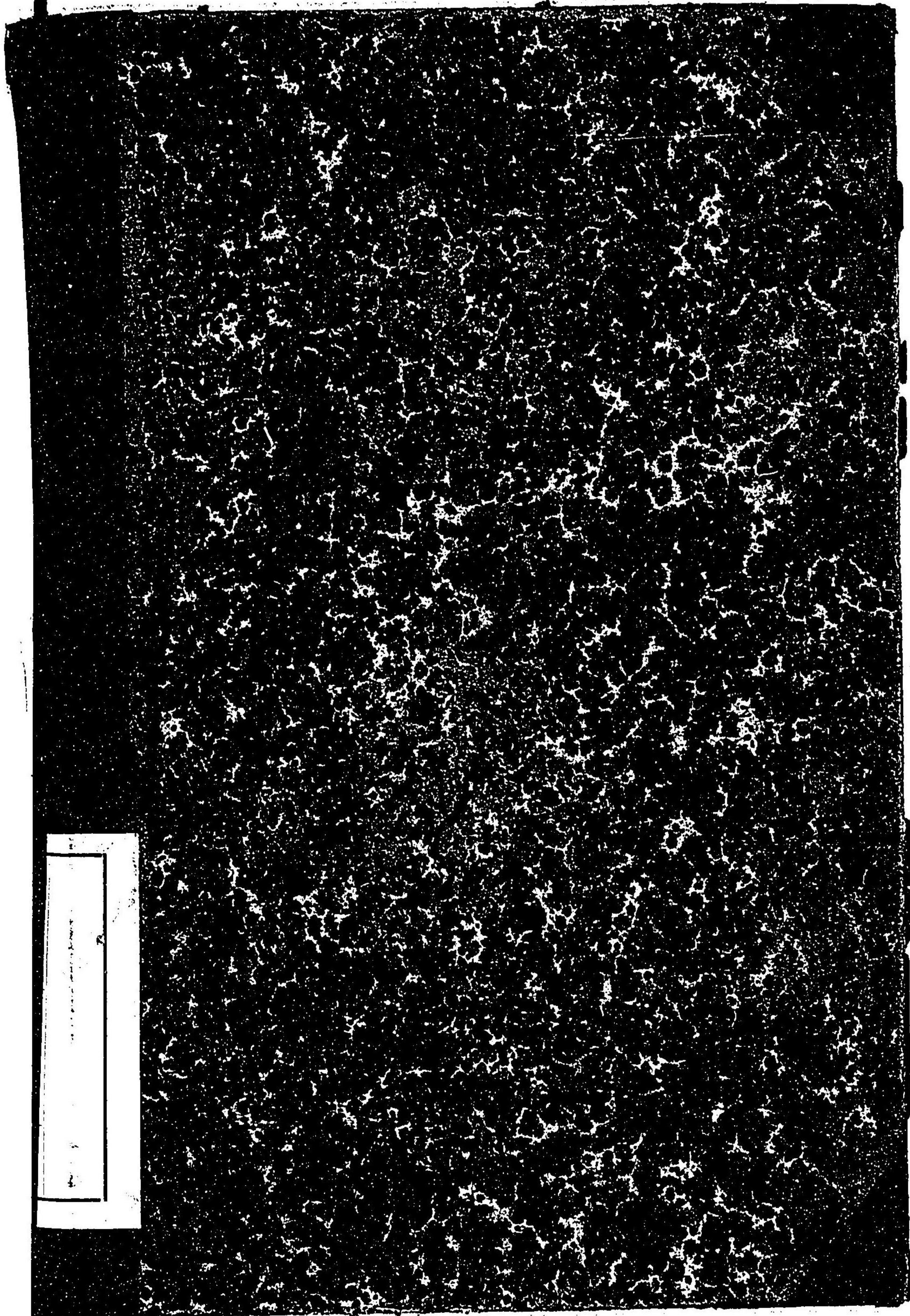
銀行一般ノ業務ハ確實御便利ニ取扱フ
 可キハ勿論預リ金ハ精々高歩ニ御預リ
 多可申御融通金モ薄利ニ御用立可申候間
 少ニ不拘御取引之程奉希上候也
 〇爲替取組先ハ全國樞要ノ地三百有餘
 ケ所アリ

一 資本金五拾萬圓
 一 積立金八萬餘圓
 一 預リ金百參拾餘萬圓

大垣本店
 岐阜支店
 今尾支店
 笠松支店
 北方支店
 黑野支店
 揖斐支店
 長良支店
 長岡支店
 醒ヶ井支店

82

191



1875
1876
1877
1878
1879
1880
1881
1882
1883
1884
1885
1886
1887
1888
1889
1890
1891
1892
1893
1894
1895
1896
1897
1898
1899
1900

025452-000-0

82-191

醒か井の里

山岸 憲雄/著

M33

ADC-2904

